



特集

かわいい



編集にあたって

大倉典子 (芝浦工業大学)

菅谷みどり (芝浦工業大学)

2007年に経済産業省が、国民の暮らしぶりの向上と経済の活性化のため、日本人の感性を活用したものづくり・サービス活動を推進するにあたって取り組むべき事項を検討し、その内容を「感性価値創造イニシアティブ」としてまとめた。ここでは「感性価値」が、従来のものづくりの価値観である性能・信頼性・価格を超えた第4の価値として位置づけられた。またACMの国際会議やIEEEの国際会議・論文誌等でも、emotionやaffective computingが話題になる機会も急増しており、今や感性を考慮することの重要性は世界の共通認識となりつつある。

このような中、日本語の「かわいい」という概念が最近特に各方面で関心を集めるようになり、日本文化固有の存在から広く世界に向けて発信される機会も増加してきた。すなわち、昨今「かわいい」と感じるものが世の中にあふれ、それが経済効果に寄与するなど、その重要性は日に日に高まってきており、今やタイなどの東南アジアやフランスなどの欧米でもその価値が認知されつつある。

さらに他の学会、たとえば日本感性工学会やIASDR（世界デザイン会議）2013でも、当会の会員が製品やサービスなどの人工物の「かわいい」というインタフェース（以下、かわいいインタフェース）について執筆したり講演したりしているが、これを情報処理の観点から概観する試みは、これまで行われてこなかった。しかし、このような試みは、「かわいい」という感性価値の起源と考えられている日本の情報処理学会にしかできないことである。さらに「かわいい」という感性価値が特に女性や若い世代で強く認識されていることから、それを特集として取り上げることは、当会の社会に対する姿勢のアピールにもなると考えられる。

そこで本特集では、「かわいい」という感性価値に着目し、その基礎研究、応用研究、活用事例について、多方面から紹介し、「情報処理」の読者の今後の研究や製品・サービスへの応用に役立つ特集を企画した。

最初の4件は、「かわいい」に関する基礎研究の紹介である。まず「1.「カワイイ」の哲学—その歴史的パースペクティブと現代的意義—」（遠藤）と「2.かわいい江戸時代絵画の背景」（金子）では、「かわいい」という日本を起源とする感性価値の文化的背景を概説していただいた。すなわち1.では、日



本の「カワイイ」文化の系譜を古代—中世—近世—近代と辿りつつ、そのグローバル化時代における社会的意義を、社会学の立場から解説いただいた。また2.では、明治時代の重厚長大の西洋思想—辺倒の時代を迎えるまでの江戸時代に、縄文時代より脈々と日本文化の中で育まれていた「かわいい」という感性価値が成熟期を迎えていたことを、絵画の専門家の立場から解説いただいた。さらに「3.かわいい人工物の系統的研究—「かわいい」という感性価値を持つ人工物の物理属性—」（大倉）では、筆者の約10年間の「かわいい」インタフェースに関する研究成果を概説し、「4.“かわいい”感情の心理学モデル」（入戸野）では、心理学からのモデル構築について紹介いただいた。

次の3件は、「かわいい」の応用研究を紹介いただいた。まず「5.いきいきと動くかわいいインタラクティブキャラクタ」（三武）では、「かわいいインタフェース」の適用事例として、かわいい動作の自動生成や動くぬいぐるみロボットなど、かわいい生き物と触れ合う体験をもたらすインタラクティブメディアについて概説いただいた。さらに「6. Lovotics：ロボットとの愛と性」（Cheok 他）では、かわいさに由来する無償の愛に関連してロボットの Lovotics という新しい研究分野について概説いただいた。ま

た「7.かわいい画像を見たときの生体反応」（堀江他）では、2種類の「かわいい」画像を見た際の生体反応の違いに関して、心拍数や脳波などの生体信号測定による評価について概説いただいた。

さらに最後の3件は、「かわいい」を活用した取り組みの紹介である。「8. Fab Girl：感性を活かしたものづくり～「かわいい」ものづくりワークショップ実践報告～」（菅谷他）は、「かわいいインタフェース」を持つものづくりに対する女子学生のグループワークの試みの報告、「9.かわいい感性デザイン賞—日本感性工学会の取り組み—」（庄司）は、日本感性工学会が主催している「かわいい感性デザイン賞」に関する報告、そして「10. ACM CHI 2015 日本文化と感性（Asian CHI Symposia “Japanese Culture and Kansei”）開催報告」（大倉他）は、ACM CHI 2015で開催された Asian CHI Symposia “Japanese Culture and Kansei” について主催者側および参加者側の両面から報告した。

本特集の特徴として、執筆者に当会の非会員が多い点が挙げられる。非会員の執筆者には、この場をお借りして、厚く御礼申し上げたい。

（2015年11月25日）